

原爆に引き裂かれた親子の記憶を朗読劇で次代へつないでいく。

広島、長崎での原爆被害の実態を次代へ引き継ぐため、地人会新社は4年間途絶えていた朗読劇『この子たちの夏』1945・ヒロシマ ナガサキを復活上演した。人間の愚かさや失った家族への思いなど、体験者たちの生の声を訴えかける構成は、今の日本の現状にも通じる作品である。

絶対に忘れてはいけない 悲惨な記憶。

『この子たちの夏』1945・ヒロシマ ナガサキは戦争の悲惨さと原爆の残酷さを訴える朗読劇である。1985年に演劇制作体「地人会」によって上演され、以来全国で767回上演されてきたが、2007年の同会の解散とともに途絶えていた。

1945年8月、広島と長崎に落とされた原子爆弾。即死の死者数だけでもあわせて10万人を越え、続く放射能によってさらに10万人以上がなくなった。東日本大震災の記憶も新しい今、その数字の恐ろしさがわかる。

しかし、どのような悲惨な出来事も時を経ると少しずつ風化していく。

今回の企画を牽引した渡辺江美さんは公演の復活のために地人会新社を立ち上げた。

「日本は戦争による世界で唯一の被爆国です、これは絶対に風化させてはいけない記憶ですから、どうしても再開したかったのです」とその目的を語る。

4年ぶりに復活した朗読劇は、地人会新社と社団法人国際演劇協会による上演委員会の主催で、8月6日～9日、世田谷パブリックシアターで上演された。構成・演出の木



朗読劇のポスター



朗読劇の様子



会場には子どもから高齢者まで、幅広い年齢の人が集まった

村光さんは地人会時代と同じである。出演はかとうかず子、島田歌穂、高橋礼恵、西山水木、根岸季衣、原日出子。これまで多くの女優たちが演じてきた役であるが、戦争体験者の手記に基づく台本の内容はずしりと重い。

「中には戦争を知らない私に演じきれぬのかしらと不安をもらした役者さんもいましたよ」と渡辺さんは語る。

また、資金難でわずかな出演料しか用意できなかったという。それでもスタッフ、キャストが快く引き受けてくれたのは、このテーマに演劇が果たすべき役割があることを感じたからだろう。

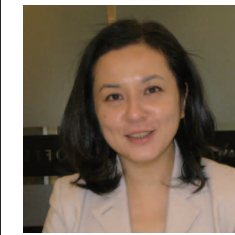
突然家族を失った悲しみは、 時が経っても癒えることはない。

朗読劇は「ヒロシマ」「ナガサキ」「そして…」の三部構成からなっている。木村さんが書籍だけではなく、遺族の方がまとめた冊子や資料などを時間をかけて集めたものがベースになっている。

シナリオの一部を紹介する。

「八月六日のその朝も、おかあさんはしかたなく大豆ごはんを炊きました。嫌いといったあなたは、おかあさんから叱られて涙をいっぱい浮かべて食べました。そして学校へ行ったのね。ランドセルを背負って『行ってきます』。これが最後のことばでした。あなたはそのまま二度とおかあさんのところへは帰って来なかったの。あのとき、なぜ叱ったのだろうと、二十数年たった今も心に残ってしかたがないの。あなたはどこで死んだの……」

担当者より



資金だけではなく
勇気もいただいた
助成でした。

地人会新社
企画・制作
渡辺江美さん

朗読劇の場合、大きな劇場に向きませんので、満席になっても入場料収入だけでは、経費をまかなえません。しかし、この作品は日本人として後世に残さなくてはならないと思います。今回AJOSCのご支援を受けて4年ぶりに上演でき、皆様のお志に勇気いただきました。ありがとうございました。

数行を読んだだけでも、母親の思いが伝わる。「この子たちの夏」がタイトルだが、子どもと同じくらい母親の声が登場し、家族と突然引き裂かれた哀しみは時を経ても癒えることなく、残された者は理由もなく自分を責めるということを語っている。さらに朗読を日本の童謡や賛美歌、レクイエムなどの音楽が下から支えるという演出で、何度も上演してきた木村さんでも、「毎回心に突き刺さる」とプログラムに記している。

観客席は老若男女でまんべんなく埋め尽くされた。多くの子どもたちも内容をきちんと理解したようだ。

「ぼくは人をくるしめる人がゆるせません。ぼくだんをつくった科学しゃもゆるせません。そのちえがあるなら、ひとのやくにたつものをいっぱいつくったほうがよいとおもいます」。小学校2年生が寄せた感想である。

東日本大震災のあとの上演だが、あえて関連づけはしなかったものの、観客には生々しい記憶とともに刻まれたようである。

「朗読劇だから伝えられることもあります。大切なことは、二度と同じことがくり返されないよう、この記憶を次代へまたその先へと継いでいくことです」と渡辺さんは語る。

地人会新社ではこの先も『この子たちの夏』1945・ヒロシマ ナガサキを続けていく予定である。